

$\alpha_e$  は1以下にも、逆に1.5以上にもなり、 $\alpha_e$  を一定とみなすことはできない。多数の研究者による平均的な  $\alpha_e$  の観測値一覧表が Nakagawa (1984) の論文にも示されている。 $\alpha_e$  値がばらつく理由として、多くの研究者は移流の効果とかその他いろいろの事をあげているが (Brutsaert, 1982), 式 (4) または (4') で明らかなように  $\alpha_e$  は気温と大気湿度のほか、地表面状態 ( $J$  と  $i$ ) によって大きく変化する。 $J$  と  $i$  が同じような試験地で  $\alpha_e$  を求めれば平均的に同じ結果が得られるのは当然である。

### 6. あとがき

地表面状態が熱収支に及ぼす効果を調べ、今後の研究で注意すべき事として次を得た。

(1) 地表面の温度や熱収支は地表面の交換係数 ( $J$ ) と蒸発能 ( $i$ ) によってきまる。それゆえ、地表面構造が  $J$  と  $i$  をどのように変えるかを今後明らかにする必要がある。地表面温度や熱収支の  $J$  に対する敏感度は  $J=1$  の周辺で最も大きく、 $J \geq 10$  で小さくなる。気温が低いときの熱収支は  $i$  の大小によらず、乾燥地面の熱収支に近くなる。

(2) 地表面蒸発量の平衡蒸発量に対する比  $\alpha_e$  は一定でなく、地表面状態で変化する。そのため、蒸発量評価には  $\alpha_e$  を用いるのは適当でない。地表面状態によって交換係数と蒸発能が共にどう変化するかに主眼をおいた研究が望まれる。

### 文 献

Brutsaert, W.H., 1982: Evaporation into the atmosphere, Reidel Pub., Dordrecht Holland, 299 pp.  
 萩野谷成徳, 近藤純正, 森 洋介, 1984: 山岳や谷あいの地上風に及ぼす地形の影響, 天気, 31, 497-505).  
 近藤純正, 1981: 地表面のフラックスを求める方法, 竹内・近藤著: 大気科学講座第1巻第4章, 89-106, 東大出版会, 226 pp.  
 ———, 1982: 大気境界層の科学, 東京堂出版, 219 pp.  
 ———, 桑形恒男, 1983: 東北地方多地点一斉大規模山林火災を誘発した1983年4月27日の異常乾燥強風(2), 天気, 31, 37-44(52).  
 ———, 山沢弘実, 1983: 局地風速と現実複雑地表面の粗度, 天気, 30, 553-561.  
 Nakagawa, S., 1984: Study on evapotranspiration from pasture, Envir. Res. Center Papers, Tsukuba Univ. No. 4, 87 pp.

## ==== 支部だより ====

### 中部支部研究会の開催について

中部支部では、下記の通り支部研究会を開催する予定です。

期 日 昭和59年11月22日 (木)

場 所 国鉄静岡職員センター第1会議室

1. 服部満夫 (名古屋地台): 台風 8310 号による愛知県・東濃地方の豪雨のメソ解析
2. 高木伸之・竹内利雄 (名大空電研): モンテ・カルロ シミュレーションによる正極性落雷の発生頻度の推定
3. 天野 満 (尾鷲測): 地震, 津波による港湾の振動について
4. 森田恭弘・近藤 豊, 高木増美 (名大空電研): 航空機による成層圏エアロゾルの観測——エアロゾル濃度と粒径分布——
5. 向井利明 (静岡地台): トリチウム 及び 安定同位体から見た富士地方の陸水
6. 小原義広 (静岡地台): 震度と加速度との関係に

ついて

7. 下山紀夫, 他 (名古屋地台): 名古屋の気温特性
8. 中条屋 博・若山晶彦 (金沢地台): 高層データによる短時間の大雪予測の可能性
9. 樋口敬二・大畑哲夫・高原浩志・徳岡敦子・長谷川浩 (名大水圏研): 富士山の氷穴
10. 高原浩志 (名大水圏研): 積雪面上での気塊の熱的変質
11. 岩坂泰信 (名大水圏研): 水蒸気量の気球観測
12. 近藤 豊・岩田 晃・森田恭弘・高木増美 (名大空電研): 対流圏 NOx の緯度分布の航空機観測
13. 岩井邦中・中田元司 (信州大教育): 浮遊する大水滴の振動と分裂について
14. 瀬古勝基・武田喬男 (名大水圏研): 極く局地的な豪雨について